

このありさまを見た佐多蔵は、

「おまえ、武士の子であることを忘れたのか。」

と顔をまっ赤にして怒りました。

「戦場では、食べものがなければ、犬でも猫でもなんでも食べて戦うものだぞ……。」

「……………」

「ここは戦場と思え。会津のはじをそそぐまでは戦場だぞ……。」

いつもの静かな調子とはうって変って、語気あらく五郎を叱りました。

あまりの父のはげしさに、五郎はおどろきふるえて、口の中にふくんだ犬肉を目をつむって飲み下しましたが、胸につかえて苦しみました。犬の肉の食事は二十日間も続きました。

春になると、どうしたことか、五郎の髪かみの毛が抜けはじめ、ついに坊主頭ぼうずの